

大島塾新聞

ムロノキ
新聞社

第13号

広告



五島列島釣行記

二〇一八秋の五島釣行記

十一月二十四日(土)大潮

満潮九時、干潮十五時

五月の例会が嵐にはばまれ一年ぶり、満を持しての五島遠征である。いつもは仕事を終えた金曜夜に出発するのだが、今回十一月二三日は勤労感謝の祭りで木村、向根さん、筆者の三人は午後二時早々岩国を出発した。途中佐波川PAで谷川、宇田さんと合流、天気予報に並んだ晴れマークにみんな心はうきうき。そこへ今回仕事の都合で参加できなかった作ちゃんが見送りに来た。夜の宴会にとスパークリングワインのお饌別、それにいくつかのおつまみを添えてくれた。寂しそ

てきますね」と約束し、PAを後にした。三連休のわりに渋滞することもなく、空がきれいな夕焼けに染まるころには早くも長崎道に入っていた。ドライバー木村も「いつもに比べたら運転の疲れは二割、楽なものですわ」と意気揚々。



佐波川SAにて

今回は釣り以外にも時間の余裕を利用して佐世保でちゃんぽんを食べることにしていた。下調べしておいた佐世保駅近くの「お栄(えい)さん」はすぐに見つかってちゃんぽん五人分を注文。スープをひとつくちすすった瞬間「旨っ」と声を漏らしてしまった。上等の海鮮系中華味にみな驚喜。長崎県

出身なのでちゃんぽんに関して筆者は多少の見識を持つが、この店せひ一度は訪れるべきところだと思った。それから筆者の斜め前に座っていたお客が頼んだ太麺皿うどんがこれまた美味そうで「今度来たら絶対食べよう」と思いながら、一方で「他の店のちゃんぽんも食べてみたい」という迷いが同じくみんなの心に去来した。



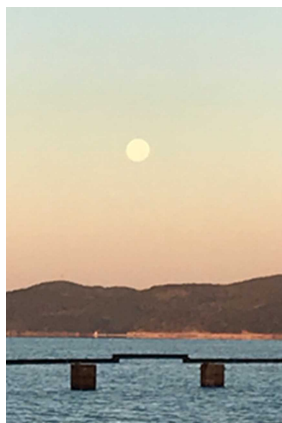
また来るぜ、お栄さん

作ちゃんがくれたワインやおもてなしの焼酎など飲みながらわいわい。YouTube動画の「釣りすぎ四平」で知恵をつけた谷川君、なにやら画策しているようだった。実は筆者も同サイトでみた「ベラの泳がせ」をやってみるつもりだ。

酔いもまわつて零時には就寝。翌朝目覚めれば傍らに重安、森光が寝ていた。彼らは仕事を終えて光市を出発したので着いたのは一時過ぎ、気づかなかった。これで今回七名のメンバーがそろった。朝は微風、空には夜の名残りの満月が。七時半に港を出発し一時間余りで六島に到着。向根さんと筆者は「墓の下」、木村、谷川、宇田さんは「福祉の波止」、それぞれ希望していた場所にあけてもらった。ヒラマサを狙う重安、森光組はさらに小一時間船に揺られて沖磯に瀬上がりした。さあここから丸一日、いかなるドラマが繰り広げられますか…。

【墓の下】

この場所大潮の満潮時間の磯上がりは非常に足場が悪い。不安定な岩場に荷物を降ろすだけで多量の汗をかいて



夜明けの満月

しまった。前夜から風呂に入っておらず、翌日帰りの車中には二晩風呂に入っていない汗まみれのオヤジが三人。今回も車を提供してくれた木村家の奥さんには感謝している。

上礁してみると強い南東の風が吹いており、その向かい風のなか向根さんは黙々とカゴを振り込み始めた。何尾かの良いサイズのイサキを釣り上げた後、奥のワンドに移動してワームを投げ込み四一^{セツ}を頭に美味そうなかハタ、アコウを六匹釣りあげた。昼間釣果のなかった筆者も夕方のマツメ時、フカセ釣りで四五^{セツ}尾長をはじめ良型グレ六尾を手にした。一段落して向根さんは新調したテントを奥の高場に設置した。筆者は寝袋を「大潮といえどもここまで潮は上がるまい」と思われた平地に広げて夜の快眠に備えた。

十九時、ムズビと味噌汁の夕食をとつているとぽつぽつと音がする。見上げれば厚い雲が上空を覆い、予報になかった雨が落ちてきた。通り雨であることを願ったが雨あしは強まり、向根さんはテントに避難した。すまなそうに「私も入れてくれませんか」とお願いすると彼は快く招き入れ、温かい焼酎ともつ煮込みの缶詰でもてなしてく

れた。かつて「ずぶ濡れマッチ売り向根」だの「蚊帳テント」(第十号、十一号参照)だの散々愚弄した筆者をこんなにやさしくもてなしてくれるなんて。本号では感謝を込めて「向根さん」と敬称をつけることにした。テントの中の温かい焼酎は美味だったが、もしガスコンロの火が燃え移ったら「中年男性二名、五島の磯の上、テントで焼死」、あさつての新聞ネタじゃね、などと笑いながら一人用テントの中で記念写真を撮っていたら徐々に雨音が遠のいてきた。向根さんのご厚情にお礼をいって仮眠を取るべく寢床に戻ると、そこまでは上がつてこないはずの海水に筆者の寝袋がぶかぶか浮いていた。寝袋ずぶ濡れ。時刻は二一時、このとき筆者は「今夜は寝ないで釣る」と覚悟を決めた。

だが悪いことばかりではない。気づけば昼間の強風はすっかり止んで空には満月、ライトがいらぬほどにあたりを照らしていた。月が出たならいづぞやの真鯛爆釣ムーンライト伝説。眠りかけた向根さんをたたき起こしすぐに釣りを再開した。案の定真鯛が連続ヒット、ただサイズはどれも三〇

センチ前後と小さかった。イサキは四〇センチ近い良型が数尾、四〇センチオーバーの尾長グレも三尾。なぜか今回尾長を釣ったのは筆者だけだった。もちろん昨夜のお礼に向根さんには一番大きな尾長をプレゼントした。

もし寝袋が水浸しになっていなかったら朝まで寝ていたかもしれないので、人生なにが幸いするかわからないと思っただ。ただしほぼ二四時間釣りっぱなしで身体はぼろぼろ。歳を考えれば節度も必要だと改めて思った。



撮影記念内テント

【福祉の波止】

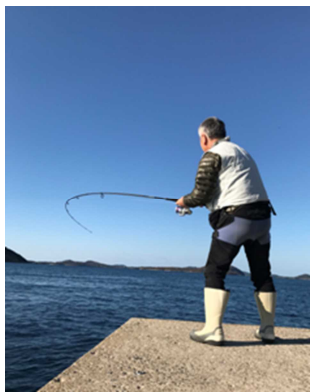
木村、谷川、宇田さん、彼らも強風にさらされていた。特にここは足場が高いからラインが風に翻弄され、かなり難渋したことだろう。そんな中我々の「墓の下」もそうだったが、ここ「福祉の波止」でも頻りにナブラが沸いたという。おそらくこの時期六島一帯にヒラマサ

が回っていたのだろう。この三人はルアーの準備も怠りなく、早速メタルジグを振り込んだ。

狙いの魚を釣り上げることはもちろん釣りの喜びのだが、予想しない魚が釣れた時のおどろきもまた一つである。昔は「外道」とよばれていたが、最近よい魚は「ゲスト」とよばれる。三人が一斉にナブラのヒラマサを狙ってジグを投げ始めた。間もなくのこと、宇田さんが釣り上げたのはなんと六〇センチ級の真鯛だった。船からのジギングではよくあるらしいが、シヨアジギングでは珍しいのではないかと知らんけど。さらに翌朝彼は真鯛狙いのカゴ釣りで今度は八一^{センチ}、五・五^{センチ}の見事なヒラスズキを釣り上げた。どちらかだけならハブニング大賞だが、この二尾を合わせると今回のMVPは宇田さんか。あとは携帯が届かないので状況がわからない沖磯の釣果次第。帰りの船に乗った時のお楽しみ。

ところで谷川君は四平さんのエスカレーター仕掛けをやってみただろうか？ 私の「ベラ泳がせ」には何事も起こりませんでした。カゴの流し方は「もう素人じゃない」の域に達していたと木村君がほめていたよ。二人とも強風で思うような釣りができにくかったかもしれない

が、一年ぶりに六島に行けたし、おいしい魚はそれぞれ手にしたから、まあよしとしよう。行きがけの約束通り、木村らの釣果の一部は帰りの佐波川PAで作ちゃんに手渡された。



沖のナブラにジグ撃ち込めば
すぐさま当たった良型真鯛

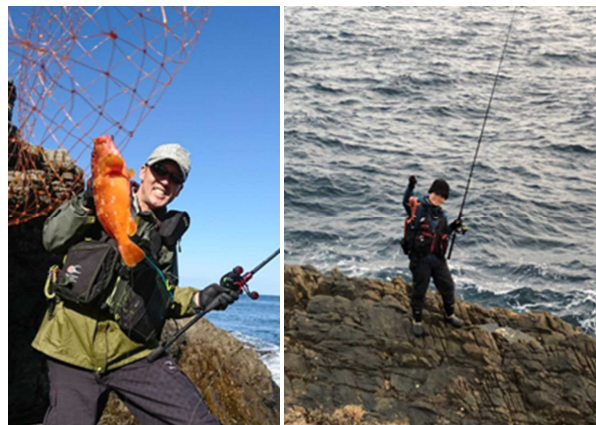


【沖磯の重安、森光】

結論から言うと彼らにヒラマサの釣

果はなく宇田さんのMVPが決定した。近くの釣り人が上げるメーター級のヒラマサを目撃したらしいが、ナブラはあまり沸かなかつたとのこと。今回はむしろ六島の方がよかつたかも知れない。我々の「墓の下」では目の前二、三〇位のところでもたびたびボイルし、ひどいときには筆者の目の前に小魚めがけてオオミズナギドリが三回突き刺さってきた。もし間違えて私の頭に落ちてきたら間違いなく死ぬな、と少しびびった。ヒラマサを狙うのであれば、来年は事前に場所を決めず当日ポーターに相談してみるのがよいかもしれないね。しかし彼らが帰ってきたアコウ、アカハタは大型のものばかりで、今回も立派なアカハタをみんなにわけてくれた二人に感謝している。

帰り間際の会話でどうやら森光君はカゴ釣りに興味がある様子。真鯛、グレ、イサキなどみんなの釣果をみた素直な気持ちだろう。一方で重安君がそれをたしなめている。重安はトップ求道者だから心が日和ることはないだろうが、森光君、カゴをやりたいかつたら教えてあげるから次の春には筆者について「千畳敷」に来なさい！



沖磯のハタは大型揃い。ヒラマサは当たらず

すればよかった。

今回は筆者事に多く紙面を費やしており恐縮であるが、もうひとつだけ。十数年ぶりだろうか、長い尾のきれいな流れ星をみた。とつさに「みんな元気で居れますように」とつぶやいた。「居のところで星は消えてしまつたが、たぶん願いは届いたものと思う。これから先も一緒に楽しい時間を過ごせることを祈って今回の稿を終える。

【編集後記】

新聞十二号で気になった猫の安否、どうやら絶滅が確定的である。今回どこにも一匹も出てこなかった。駆除された？いやいや六島の方々はみんな優しいからそんなことをするはずはない。天敵出現？いやいやそんな猛獣がいたらとても釣りどころじゃないよね。猫の伝染病？この前に来たとき彼らは鳥を餌にしていたような形跡があつた。鳥インフルエンザの猫感染？あながちな話ではないかも。近親交配による遺伝病の可能性も否定できない。いずれにしても六島の神様、さぞやさみしかろう。杞憂であればと思う。お願いだからさやかちゃん、もう一度姿を見せてください。(福)

いやあ楽しかったけど、そのような事情でほとんど寝なかつたため筆者の身体がダメージは大きかった。釣りから帰るといつも足がむくんで体重が一〜二kg増えている。三日くらいすると一時的に頻尿になって、それとともに浮腫が消えるのが常である。発汗と飲水のアンバランス、筋肉酷使による細胞内外の体液不均衡が原因と考えられるが、今回五島から帰つた翌朝の起床時にはネフローゼかと思うくらい腫が腫れていた。ここまでひどかつたらちゃんと血液や尿の電解質を測定して経時的な評価を行い「釣り師における一過性浮腫」というタイトルの症例報告に

Gallery

2019年2月山口市小郡こーばん

(広告)

真心の医療

大正通りクリニック

総合内科・腎臓内科

院長 作村 俊浩



ばらもんの新船、近日デビュー



蚊に刺されない寝方を考案(筆者)



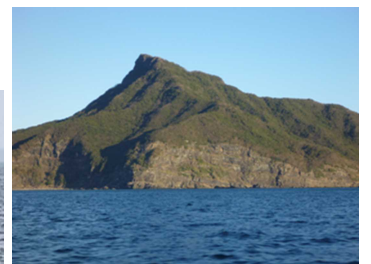
またあそぼう!



毎度絶品のむすびとてんぷら



ナブラに群がるオオミズナギドリ。沖の船はSea Bird。



平戸最南端の霊峰志々伎山。ここを過ぎればほどなく六島。

